

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

アメリカ大陸のイスパニア語における叙法について(3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福嶋, 教隆, Fukushima, Noritaka メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1627

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



アメリカ大陸のイスパニア語における 叙法について（３）

福 畠 教 隆

今回選んだ資料体においては、動詞が主要部となって名詞節を導く用例は、その大部分が標準的な叙法選択に基づくものであった。専ら直説法をとる動詞も、接続法のみをとる動詞も、また両叙法を導く動詞も、ほとんどが規範に従っていた。しかしわずかながら、標準的とは考えがたい叙法選択をしている用例が見られる。それは次のようなものである。(32)～(34)は、接続法が用いられるのが一般的だと思われる統語環境に、直説法が使われている例、(35)は逆に直説法が予想される箇所に接続法が使用されている例である。

(32) LAMENTAR:

Mientras, en Lima, Patrice Vandenberghe, director del Programa de las Naciones Unidas para el Control de Drogas en Perú informó que la producción de drogas ilícitas a nivel mundial alcanza los 500 mil millones de dólares al año, y lamentó que la ayuda y los esfuerzos que se deben desarrollar para combatir el tráfico de estupefacientes nunca *serán* suficientes y, en lo que se refiere a la dimensión del consumo en Estados Unidos, recordó que existen 12

* 本稿は、拙稿「アメリカ大陸のイスパニア語における叙法について（１），（２）」（神戸外大論叢 48: 3, 7, 1997）を受けるものである。

millones de toxicómanos que en movimiento monetario implica por lo menos cien mil millones de dólares. (M, p.20)

(33) **PROPONER:**

Pero en todo caso, cinco de los miembros de la célula, entre ellos el vicepresidente, propondrán que, cualquiera que sea el candidato, *debe* estar a salvo de cuestionamientos y presiones de carácter ético por parte de la opinión pública. (C, p.3)

(34) **PRETENDER:**

Invocar treguas informativas para que el Presidente pueda defenderse; pedir cambio de temas para dejarlo gobernar, más que una ingenuidad es una falacia. La de pretender que *puede* gobernar en una situación que se le ha vuelto insostenible. O la de plantear que una tregua de los medios *puede* contribuir al correcto desarrollo del juicio en el Congreso, cuando sería la mejor forma de facilitar el “tapen, tapen”. (C, p.4)

(35) **SIGNIFICAR:**

No se descarta la posibilidad de que, como lo propone el representante Jesús Ignacio García, haya una “ponencia colegiada”.

Esto significa que la investigación *sea* dirigida por más de un congresista. (C, p.3)

まず (32) では、lamentar が直説法を導いてる。この動詞は感情を表す動詞群に属するから、現代語では接続法を従えるのが標準的である。⁽⁹⁾

(9) 拙稿 (1978) 参照。ただし古いイスペイン語では、直説法をとることがあった。中岡 (1993) は「中世語では、特に感情表現の対象となる事柄は、近代語の場合ほど密接に接続法と結び付かず、従属節で述べられる事柄の事実性にひかれて、直説法が用いられることも多かった。」(p.140) と述べている。また Jensen 他 (1973) も「古イスペイン語では *pesar*, *ser alegre*, *espantar* のような、非常に感情的な内容を表す動詞は、普通、直説法を伴った。」(p.56) と説く。

Subirats (1987) の主動詞別補文一覧の *lamentar* の項では、「直説法 不可、接続法 可」とされており (p.263), Levy (1983) の主動詞別直説目的語節一覧によれば、この動詞は「主動詞が肯定形、否定形いずれの場合も直説法 不可、接続法 可」と記載されている (p.100)。そして実際、イスパニア人の発話から得た用例では、接続法が用いられている。次例参照。

(36) Les felicito por haber dedicado un extra al vino —tema que muchas otras publicaciones olvidan—, pero lamento también que ignoren a una zona como la de Moriles-Montilla. (*Cambio 16* 誌, No.569, 1982年10月25日, p.17)

(37) —Lamento que *haya* en España, y quizá en Europa, una subestimación de este fenómeno prodigioso. (*Cambio 16* 誌, No.918, 1989年7月3日, p.30, Felipe González 首相 [当時] の発言)

また本資料中に *lamentar* の用例は (32) の他にもう1例あるが、そちらでは接続法が使われている。

(38) El subsecretario de Gobierno de la Secretaría de Gobernación lamenta que alguno de los involucrados en las pláticas, por cualquier acto se *retire* de las negociaciones. (M, p.5)

DeMello (1996) は、イスパニア語圏の口語発話資料 *El habla en~. Materiales para su estudio* 12点を資料体として、感情動詞に導かれる節の中の叙法形態を調査した。それによれば、イスパニアの資料 (Madrid, Sevilla) では、感情動詞が接続法を導く用例が10件なのに対して、直説法を導く例は5件しかない。ところがアメリカ大陸の資料 (México, D.F., La Habana, San Juan, San José, Santafé de Bogotá, Caracas, Lima,

La Paz, Santiago, Buenos Aires) では、いずれの叙法も95件の用例が認められたという⁽¹⁰⁾。即ちアメリカ大陸ではイスパニアよりも、感情動詞の導く節に直説法を許容する度合いが高いと言える。⁽¹¹⁾

同様の傾向は、ささやかな調査ながら拙稿(1979)でも確認されている。ser una lástima, alegrarse de, sorprender という3つの感情動詞が導き得る叙法を、イスパニア人10名とメキシコ人10名を被験者として調べたところ、直説法の許容度は後者の方が高かったのである。

以上のことから、(38)のような「lamentar+接続法」という用例と並んで、(32)のような「lamentar+直説法」という事例が見られることは、アメリカ大陸のイスパニア語の特徴の1つとみなすことができるだろう。⁽¹²⁾

続いて(33)と(34)に目を向けてみよう。(33)ではproponer, (34)ではpretenderという意志動詞が直説法を従えている。先ほど見たlamentarのような感情動詞の場合は、その従属節は、内容が事実を表すことが多いので、そこに直説法を使おうとする心理には無理からぬ面がある。しかし意志動詞に導かれる節においては、願望、要求、命令などの意志が表されるのだから、接続法に代えて直説法を充てる必然性は乏しいように思われる。従って(33)、(34)は、注目すべき事例であると言えよう。

先述のSubirats(1987)によれば、proponer(se), pretender はともに「直説法 不可、接続法 可」とされている(p.264)。またLevy(1983)はproponer も pretender も「主動詞が肯定形、否定形いずれの場合も直説法

(10) ただしこの論考は、感情動詞の中にperdonarのように不適当な語彙がデータとして混入している点や、「lo+形容詞+es que」構文を一般の「ser+形容詞」文と同列に扱っている点に改善の余地が見られる。

(11) 無論、これはあくまで一般的趨勢である。イスパニア人研究者の中にも、たとえばTrujillo(1996)のように、感情動詞が従える節には直説法・接続法のいずれも使うことができるとの前提で、叙法を論じる人もいる。またLope Blanch(1958)参照。

(12) 筆者が複数のイスパニア人、アメリカ大陸の人に(32)の文法性を尋ねたところ、前者は低く、後者は高く判定する傾向が認められた。これは(33)～(35)及び(56)についても同様だった。

不可，接続法「可」と述べている（p.100）。事実，イスパニア人の発話からは，専ら接続法の用例が得られる。次の（39）～（41）は *proponer*，（42）～（45）は *pretender* の例である。

（39）—Me ha propuesto que me case con él. (Jaime Salóm, “La noche de los cien pájaros”, *Teatro español 1971-72*, Aguilar, Madrid, p.215)

（40）Y yo propongo nada más que toda esa gente —o gentuza— se quede siempre en sus “reservas”. (*Cambio 16* 誌, No.553, 1982年7月5日, p.21)

（41）Fraga propone que Galicia *asuma* todas las competencias y deja para el Estado las de hacienda, justicia y seguridad. (*La Voz de Galicia* 紙, 1992年3月11日, p.21)

（42）—Pretenderás aún que te agradezca el silencio. (Alejandro Casona, “La barca sin pescador”, *Teatro español 1962-63*, p.215)

（43）—¡Bah! ¿Pretendes que *empiece* a hacer vida de viejo? (Joaquín Calvo Sotelo, “La muralla”, *Teatro español 1954-55*, p.128)

（44）—Pretendí que me *quisiese* y creo que tampoco lo he conseguido. (Antonio Buero Vallejo, “Llegada de los dioses”, *Teatro español 1971-72*, p.158)

（45）No pretendan, después, que sus lectores *estén* atraídos por la política, la profundización cultural, etc. (*Cambio 16* 誌, No.562, 1982年9月6日, p.12)

（33），（34）は本資料における *proponer*, *pretender* の各々唯一の事例だが，無論，アメリカ大陸のイスパニア語で，これらの動詞が常に直説法を導くということではない。次の例はチリ人の書いた文章からの抜粋である。

(46) Y no pretendo que el asunto *sea* fácil de explicar para nosotros, los de Chile. (*Cambio 16* 誌, No.970, 1990年6月25日, p.112)

また(33), (34)の従属動詞は、確かに直説法現在の形をとってはいるが, *deber*, *poder* という法助動詞的なものである点も、注意が必要である。即ちここでは接続法になう機能を「法助動詞＋不定詞」という迂言形式が代替しているのである。ちょうど英語の I propose that we (should) take turns. や It is very desirable that he (may) come. における仮定法と「法助動詞＋不定詞」との併存を想起させる現象である。

以上の観察をまとめると、「アメリカ大陸のイスパニア語では, *proponer*, *pretender* のような意志動詞が, 接続法ばかりでなく, 直説法形の法助動詞による迂言形式を導くこともある」ということができる。

最後に(35)を検討しよう。これは *significar* が直説法を従える事例である。この動詞は、意志、疑惑、感情・評価のいずれの動詞群にも属さず、その従属節には平叙文的内容が示される。従って直説法を従えるのが、標準的な用法であると考えられる。

Subirats (1987) は *significar* を「直説法 可, 接続法 不可」の動詞として分類している (p.266)。ところが Levy (1983) は、この動詞を「主動詞が肯定形、否定形いずれの場合も直説法、接続法ともに可」というグループに含めている (p.115)。イスパニア人 Subirats とメキシコ人 Levy の判断が異なったわけであるが、収集事例を見る限りでは、肯定形の *significar* が接続法を導く事例は、(35) 以外には見当たらなかった。次の(47) はイスパニア人、(48), (49) はチリ人が書いた文である。(49) は接続法だが、この場合は主動詞が否定されているので、何ら特殊な事例ではない。

(47) En segundo término, debo significarles que en Cataluña *coexisten*

tres asociaciones de cetreros debidamente legalizadas e incluidas en la Federación Catalana de Caza, y no solamente una, como se indica en el escrito que nos ocupa. (*Cambio 16* 誌, No.622, 1983 年10月31日, p.16)

(48) Eso significaría que el camino *estaba* despejado, que no *había* obstáculos. (Jorge Edwards, *Las máscaras*, Seix Barral, Barcelona, 1967, p.157)

(49) —Pero eso no significa que *tengas* vocación— dijo la gorda. (*Ibid.*, p.25)

また本資料からは「significar+名詞節」の事例は、(35) 以外に 3 件得られたが、全て直説法を従えている。

(50, 51) Dictar orden judicial significa que los infractores o quienes incurran en la violencia *serán* procesados por la justicia, mientras que orden militar es el refuerzo de la vigilancia para imponer orden. Dictar orden social significa que el Estado *emprenderá* obras sociales como construcción de escuelas, servicios de agua potable, energía eléctrica y centros de salud. (U, 13)

(52) Supongamos exageradas las cifras del BM. Esto significa que las oficiales y gubernamentales *están* maquilladas. (M, p.5)

(35) で接続法が用いられているのは、「その調査は複数名の議員の手で行われるべきだということを意味する」といった文意を表すためである。直説法指向の動詞が導く節が「～すべきだ」という義務的な内容を表すには、*deber*, *tener que* のような法助動詞的表現を利用するのが一般的だが、ここでは接続法という単一形にその機能をになわせている。これは (33), (34)

のように接続法を迂言形式で代替しようとする傾向とは、正反対の傾向である。ここには相反する指向を持つ現象が同時に起こっている。これはちょうど、前置詞 *de* を本来不要な個所に用いる *dequeísmo*（例 *Me prometió de que vendría.*）と、前置詞 *de* を脱落させる *queísmo*（例 *Me hizo la promesa que vendría.*）が共存しているという事態を想起させる。⁽¹³⁾

以上の資料に基づく限り、少なくともアメリカ大陸の新聞で用いられるスペイン語では、接続法の機能の領域は、時には法助動詞によって取って代われ、時には法助動詞の領域にまで拡張されるような状態にある、ということができるのではないだろうか。

動詞主要部に導かれる名詞節の検討を終えたので、続いて形容詞を主要部とする事例に移ろう。まずその支配する従属節の状況を表（53）に示す。表中、*印は、該当の事例に「*lo*+形容詞+*es que*」構文が*の個数だけ含まれていることを示す。例えば *cierto* の項を見ると、「直・肯」の欄に「4***, (1*)」という記載がある。これは「肯定形の主節+*que*+従属節」という構文における従属節に直説法が用いられた事例が、資料としてのアメリカ大陸各地の新聞から4例、参考資料としてのスペインの新聞から1例あったが、その4例のうち3例までが「*lo*+形容詞+*es que*」構文をとっていたこと、参考資料からの事例も同構文をとっていたことを表す。この措置をとったのは、後述するように、同構文においては叙法選択の基準が通例とは異なる場合があるからである。

(13) *dequeísmo*, *queísmo* については、我が国にも中岡（1991, 1992）のような優れた考察がある。Rabanales（1974）、Lázaro Carreter（1981）のように、これら2つの現象を「対立しつつ、引きつけあって、同一方向に進んでいる」と見做す研究者も多い。

(14) 表の読み方については、前稿「アメリカ大陸のスペイン語における叙法について（2）」（神戸大論叢 48: 7, 1997）pp.62～63を参照されたい。

(53) 形容詞主要部の事例（直説法・接続法）一覧

	直・肯	直・否	直・si	直・Q	接・肯	接・否	接・Q	計
absurdo	—	—	—	—	1	—	—	1
aconsejable	—	—	—	—	2	—	—	2
bueno	—	—	—	—	2,(1)	—	—	2,(1)
cierto	4***,(1*)	—	—	—	—	—	—	4,(1)
claro	3	—	(1)	1	—	1	—	5,(1)
consciente	3	—	—	—	—	—	—	3
conveniente	—	—	—	—	1	—	—	1
deseable	—	—	—	—	1*	—	—	1
deseoso	—	—	—	—	1	—	—	1
difícil	—	—	—	—	2,(2)	—	—	2,(2)
evidente	3	—	—	—	—	—	—	3
grave	1*	—	—	—	1	—	—	2
ideal	—	—	—	—	3***	—	—	3
impensable	—	—	—	—	(1)	—	—	0,(1)
importante	1*	—	—	—	—	—	—	1
imposible	—	—	—	—	2,(1)	—	—	2,(1)
improbable	—	—	—	—	1	—	—	1
incongruente	—	—	—	—	2	—	—	2
indudable	2*	—	—	—	—	—	—	2
injusto	—	—	—	—	2	—	—	2
justo	—	—	—	—	2	—	—	2
lamentable	(1*)	—	—	—	1	—	—	1,(1)
lastimoso	—	—	—	—	2	—	—	2
necesario	—	—	—	—	1	—	—	1
obvio	1	—	—	—	—	—	—	1
partidario	—	—	—	—	(1)	—	—	0,(1)
posible	1	—	—	—	1,(1)	—	—	2,(1)
preocupante	2**	—	—	—	1	—	—	3
probable	—	—	—	—	(1)	—	—	0,(1)
satisfecho	—	—	—	—	(1)	—	—	0,(1)
sorpresivo	—	—	—	—	1	—	—	1
trascendental	1*	—	—	—	—	—	—	1
triste	—	—	—	—	(1)	—	—	0,(1)
計	←……………23,(3)……………→			←……………31,(10)……………→			54,(13)	

大半の事例では、標準的な叙法選択が行われている。grave, importante, preocupante など、元来接続法を指向する形容詞が直説法を従えている例があるが、いずれも「lo+形容詞+es que」構文である。次例参照。同構文においては、この現象は普通に見られることであって、これらの事例は何らアメリカ大陸のイスパニア語特有のものではない。⁽¹⁵⁾

(54) Lo más grave del eventual triunfo de Buchanan es que *parece* legitimar las ideas de los grupúsculos que en los últimos años han estado funcionando en la periferia de las instituciones, como las milicias armadas, los antisemitas, el Ku Kux Klan. (A, p.20)

(55) 'Lo más preocupante en México es que, debido a la crisis económica, la clase media mexicana se *está* extinguiendo y los problemas financieros causados a los mexicanos por la crisis del año pasado *están* aumentando el nivel de pobreza', subrayó Koch-Weser. (M, p.5)

わずかに特異な例と言えそうなのは、posible が直説法を従える、次のような事例である。

(56) ¿Será posible que las poderosas agencias estadounidenses de espionaje no *sabían*, en su momento, de los movimientos financieros de Raúl? (M, p.4)

(15) 現に参考資料としてのイスパニアの新聞からも、次のように lamentable という本来は接続法を指向する形容詞が、この構文で直説法を従える例が得られている。拙稿 (1992), Butt 他 (1994: 251), Sastre (1997: 111) を参照。

(xiii) Lo lamentable es que la crispación extrema en que se ha desarrollado la vida política durante los últimos tres años y los ataques desconsiderados entre las fuerzas políticas, que han recurrido con insoportable frecuencia a la demagogia y a la difamación, *harán* más difícil el consenso y el pacto que demanda una situación así. (E, p.14)

posible は現代語では、通例、接続法に従えるのが通例とされている形容詞である。⁽¹⁶⁾たとえば Butt 他 (1994: 242), Sastre (1997: 66) はそのように規定している。また収集文例は、次のように専ら接続法の事例である。

(57) —¿Cómo es posible, entonces, que de pronto lo *recuerdes* todo con tanto detalle? (Jaime Salom, “La noche de los cien pájaros”, *Teatro español* 1971-72, Aguilar, Madrid, p.233)

(58) —Pero entonces, ¿dónde diablos nos hemos metido? Yo soy un poco distraído y puedo equivocarme; pero usted... ¿Es posible que *haya venido* aquí sin saber a dónde venía? (Alejandro Casona, *Los árboles mueren de pie*, 1949; 1979, Losada, Buenos Aires, p.26)

(59) Es posible que a la situación actual se *haya llegado* por culpa de las carencias personales del Presidente Calvo Sotelo. (*Cambio 16* 誌, No.553, 1982年 7 月 5 日, p.3)

また今回の資料でも、(56) 以外の 2 例は接続法をとっている。

(60) Dependiendo del tratamiento legal que se de [*sic*] al caso, es posible que la campaña samperista también *haya caído* en un ocultamiento de información, que podría tener consecuencias penales. (C, p.8)

(16) 古典イスパニア語では、possible が直説法に従える例が多かった。Spaulding (1943: 169) のあげる次例を参照。

(xiv) —¿Es posible, señor Montesinos, que los encantados principales *padecen* necesidad? (Miguel de Cervantes, *El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*, II, 23)

(xv) ¿Es posible —dije yo— que *hay* matemática en eso? (Francisco de Quevedo, *Historia de la vida del Buscón*, VIII)

なお、これまでに引用した Subirats (1987) や Levy (1983) の分類は、動詞を主要部とする複文に限っているので、possible の導く叙法については言及がない。

- (61) A medida que avanzaban las sociedades europea y estadounidense fue posible que las familias *protegieran* a sus hijos. (E, p.14)

以上の点を考慮すると、事例(52)は、(32)の *lamentar* の場合の延長線上にあるのではないかと考えられる。つまり感情、価値判断を表す主節に導かれる節に、接続法に代わって直説法が現れる現象が、主節が可能性を表す事例についても見られるということである。これは4. 3節で扱った *ra* 形の直説法過去・過去完了的用法とは異なり、時事文独特の現象だという指摘もないようであるから、アメリカ大陸のイスパニア語の特徴と見て良いかと思う⁽¹⁷⁾。

では次に、名詞及び副詞に導かれた名詞節に触れておこう。その全体像は次のようになる。

(17) 江藤(1994), Martínez Marín(1993:141) 参照。なおアメリカ大陸のイスパニア語では、次の例のように、時事文ではなく文学作品でも主要部が価値判断や可能性を表す場合に、従属動詞の叙法選択が非標準的な場合がある。

(xvi) Es curioso que cuando el avión de Air France aterrizó trayéndome de regreso tres años más tarde —¿por qué será que siempre siento la necesidad de decir que fueron «tres años» en vez de la verdad, que fueron dos y un mes?—, contrario a la ocasión de mi despedida, varios proustianos se *congregaron* en Los Cerrillos para darme la bienvenida: (...) (José Donoso, “El tiempo perdido”, *Nuevas novelas breves*, 1982; 1996, Alfaguara, Madrid, pp.388~389)

(xvii) Levantó su mirada azul de *vitreau* que cruzó con la mía —no puedo negar que durante un minuto especulé con la posibilidad de que se *detuvo* allí no porque le interesaran las camisetas sino porque me vio a mí—, iluminando con su repentina sonrisa dorada su rostro maravilloso, y el mío, y el ámbito entero del gran almacén. (*Ibid.*, pp.366~367)

DeMello(1995)の調査によると、資料体(先述のDeMello(1996)のものと同じ)の中に *ser posible que* の用例は72件あり、うち69件が接続法、3件が直説法(Madrid, México, D.F., Buenos Aires 各1件)の用例であったという。つまりイスパニア人の発話からも「*ser posible que*+直説法」の例が得られたわけだが、この文は次のように、主節と従属動詞の間に挿入句が介在しており、これが話者の叙法選択に影響を与えたとも考えられる。

(xviii) —Tengo bastantes asignaturas por trabajar..., entonces es posible que yo, deliberadamente ya desde ahora, *tengo* que estudiar un poco a fondo el programa general del curso. (DeMello, 1995:355)

(62) 名詞主要部の事例（直説法・接続法）一覧

	直・肯	直・否	直・si	直・Q	接・肯	接・否	接・Q	計
<i>acuerdo</i>	1,(1)	—	—	—	1	—	—	2,(1)
<i>asunto</i>	—	—	—	1	—	—	—	1
atención	—	—	—	—	1	—	—	1
causal	—	—	—	—	1	—	—	1
<i>conclusión</i>	1	—	—	—	—	—	—	1
condición	—	—	—	—	2	—	—	2
<i>cuenta</i>	2,(1)	—	—	—	1	—	—	3,(1)
dato	—	—	—	—	(1)	—	—	0,(1)
democracia	—	—	—	—	(21)	—	—	0,(21)
derecho	—	—	—	—	(1)	—	—	0,(1)
<i>discusión</i>	—	—	1	—	—	—	—	1
<i>efecto</i>	2	—	—	—	—	—	—	2
<i>evidencia</i>	1	—	—	—	—	—	—	1
<i>falsedad</i>	(1)	—	—	—	—	—	—	0,(1)
<i>hecho</i>	1	—	—	—	—	—	—	1
hipocresía	—	—	—	—	1	—	—	1
idea	—	—	—	—	2	—	—	2
interés	—	—	—	—	1	—	—	1
<i>irresponsabilidad</i>	—	—	—	—	1	—	—	1
lástima	—	—	—	—	1	—	—	1
mentira	—	—	—	—	(1)	—	—	0,(1)
<i>noticia</i>	(2)	—	—	—	—	—	—	0,(2)
<i>pena</i>	(1)	—	—	—	—	—	—	0,(1)
<i>percepción</i>	1	—	—	—	—	—	—	1
prioritario	—	—	—	—	1	—	—	1
<i>pregunta</i>	—	—	—	1	—	—	—	1
<i>problema</i>	1	—	—	—	—	—	—	1
propuesta	—	—	—	—	2	—	—	2
<i>punto</i>	1	—	—	—	—	—	—	1
quebradero	—	—	—	—	2	—	—	2
<i>realidad</i>	(1)	—	—	—	—	—	—	0,(1)
<i>relieve</i>	(2)	—	—	—	—	—	—	0,(2)
<i>resultado</i>	(1)	—	—	—	—	—	—	0,(1)
salida	—	—	—	—	1	—	—	1
<i>significado</i>	1	—	—	—	—	—	—	1
<i>tema</i>	—	—	—	1	—	—	—	1
計	←……………16,(10)……………→			←………18,(24)………→			34,(34)	

(63) 副詞主要部の事例（直説法・接続法）一覧

	直・肯	直・否	直・si	直・Q	接・肯	接・否	接・Q	計
bien	—	—	—	—	1	—	—	1
independientemente	—	—	—	—	(1)	—	—	0,(1)
計	←……………0,(0)……………→				←………1,(1)………→			1,(1)

名詞が主要部になる複文とは、la verdad es que ～, el hecho es que ～, tener en cuenta que ～ のようなものを指す。el hecho de que ～, darse cuenta de que ～ のように、従属節が前置詞を介して名詞の補足成分となる場合は、名詞修飾節とみなし、次の5. 3節で扱う。

副詞が主要部になる事例としては、antes de que, después de que など がまず念頭に浮かぶが、これらは全体で副詞的に働いている点に着目して、副詞節とみなす。それらを除くと、estar bien que ～ のような、ごくわずかな事例しか残らないので、表(63)は極めて小さなものになっている。

名詞主要部、副詞主要部が従属節をとる事例では、アメリカ大陸のイスパニア語特有と思われるものは見当たらなかった。なお参考資料 E には、democracia という語が接続法を導く事例が21もあるが、これは国会選挙を扱った一論説から得られた。表現効果をねらったの同一形式反復であり、本稿では特に考慮の必要はないと考える。参考までに例をあげる。

(64) La democracia es que *haga* sol el día D y que el único suceso digno de mención en el telediario *sea* el de aquella señora que continúa preguntando, desde el 77, dónde se elige a Franco. (E, 19)

(以下次稿)

参 考 文 献

- Butt, John & Carmen Benjamin (1988, 1994²) *A new reference grammar of modern Spanish*, Edward Arnold, London.
- DeMello, George (1995) "Alternancia modal indicativo/subjuntivo con expresiones de posibilidad y probabilidad", *Verba* 22, Universidade de Santiago de Compostela.
- ____ (1996) "Indicativo por subjuntivo en cláusula regida por expresión de reacción personal", *Nueva Revista de Filología Hispánica* 45, El Colegio de México, México, D.F.
- 江藤一郎 (1994) 「時事スペイン語における“接続法過去形”について」, 外国語教育 20, 天理大学。
- Jensen, Frede & Thomas A. Lathrop (1973) *The syntax of the Old Spanish subjunctive*, Mouton, The Hague.
- Lázaro Carreter, Fernando (1981; 1997) "El dequeísmo", *El dardo en la palabra*, Galaxia Gutenberg, Barcelona.
- Levy, Paulette (1983) *Las completivas objeto en español*, El Colegio de México, México, D.F.
- Lope Blanch, Juan M. (1958) "Algunos usos de indicativo por subjuntivo en oraciones subordinadas", *Nueva Revista de Filología Hispánica* 12.
- Martínez Marín, Juan (1993) "El lenguaje periodístico. Notas historiográficas y de caracterización", *Anuario de Lingüística Hispánica* 9, Universidad de Valladolid.
- 中岡省治 (1991) 「余剰の De」, *Estudios Hispánicos* 16, 大阪外国語大学。
- ____ (1992) 「中世イスパニア語の dequeísmo について」, *Estudios Hispánicos* 17.
- ____ (1993) 『中世スペイン語入門』, 大学書林。
- Rabanales, Ambrosio (1974) "Queísmo y dequeísmo en el español de Chile", *Homenaje a Angel Rosenblat en sus 70 años* (Luis Quiroga Torrealba 他・編), Instituto Pedagógico, Caracas.
- Sastre, María Angeles (1997) *El subjuntivo en español*, Colegio de España, Salamanca.
- Spaulding, Robert K. (1943) *How Spanish grew*, University of California, Los Angeles.
- Subirats-Rüggeberg, Carlos (1987) *Sentential complementation in Spanish*, John Benjamins, Amsterdam.
- Trujillo, Ramón (1996) "Sobre el uso metafórico de los modos en español", *El verbo español* (Gerd Wotjak 編), Vervuert, Frankfurt.

拙稿（1978）「イスパニア語接続法の感情動詞に導かれる用法について」，外国語教育 5。

——（1979）「イスパニア語接続法の名詞節における用法について」，外国語教育 6。

——（1992）「「Lo+形容詞+es que」構文における叙法選択について」，神戸外大論叢 43: 7。

附 記

神戸外大論叢 48: 3, 7 掲載の拙稿「アメリカ大陸のイスパニア語における叙法について（1），（2）」に次の誤記がありました。お詫びして訂正します。

（1）p.75 下から 9 行目 堀田英男→堀田英夫

p.75 下から 7 行目の上に 1 行追加：

Kany, Charles (1945) *American Spanish Syntax*, University of Chicago.

（2）p.62 (30)	U	M	C	A	計	E
a. 動詞主要部	113	462	85	127	787	80
b. 形容詞主要部	1	9	5	8	23	3
c. 名詞主要部	3	4	8	1	16	10
d. 副詞主要部	0	0	0	0	0	0
計	117	475	98	136	826	93

p.69 saber 11, (1) / 2, (1) / 7, (3) / 4 / - / - / - / 24, (5)

→11, (1) / 2 / 7, (3) / 4, (1) / - / - / - / 24, (5)